応用生態工学会ニュースレター　　No. 90
Ecology and Civil Engineering Society（ECESJ）

2021 年（令和３年）１月 25 日（月）発行

〔発行所〕　応用生態工学会事務局　〒102-0083　東京都千代田区麹町 4-7-5 麹町ロイヤルビル 405 号室
TEL：03-5216-8401 FAX：03-5216-8520　E-mail：eces-manager@ecesj.com　HP：https://www.ecesj.com/
〔発行者〕　応用生態工学会（編集責任者：幹事長　北村　匡，事務局長　青江　淳）

１　はじめに １
２　応用生態工学会第 24 回総会報告 ２
３　応用生態工学会 2020 年度 Web 研究発表会報告 ４
４　第 24 回札幌大会の企画 ７
５　行事開催報告
5.1　応用生態工学会仙台　『仙台湾南部海岸環境追跡プロジェクト
～東日本大震災後の海岸堤防について～』
フィールド調査（Ｒ１報告会）報告..... ９
5.2　応用生態工学会福岡　2020 九州地区事例・研究発表会報告 ... １３
5.3　応用生態工学会札幌
テキスト勉強会「河道内氾濫原の保全と再生」報告..... １４
６　理事会・幹事会報告
6.1 第 108 回理事会（メール会議）報告 １７
７　会員のみなさまへのお誘い １８
８　2020 年度行事の経過と今後の予定..... ２０
９　事務局より ２１

１　はじめに

今号では、第 24 回総会報告、2020 年度 Web 研究発表会報告、第 24 回札幌大会の企画、各地の活動状況など、学会の動きをお伝えします。

第 24 回総会報告を掲載しました

新型コロナウイルス感染拡大を受けて、2020 年度の第 24 回総会については、例年の対面とメール・FAX・郵送による委任状提出の併用に替えて、ホームページに掲載した総会議案に対する質問・意見・賛否をメール・FAX・郵送にて回答していただく方法で開催いたしました。正会員数 860 名のうち、313 名から回答が提出され、審議事項はすべて承認されました。

応用生態工学会 2020 年度 Web 研究発表会報告を掲載しました

第 24 回札幌大会の１年間延期の決定に際して、理事会から 2020 年度の研究発表の機会を失うこと

に対する救済措置を検討するよう要請があり、応用生態工学会東京の有志と情報サービス委員会で準備を進め、学会初となる非対面のオンライン研究発表会を開催しましたのでその結果を報告します。

第 24 回札幌大会の企画について掲載しました

2021 年札幌大会実行委員会では、2021 年９月 22 日（水祝）～25 日（土）の日程で、①対面のみの開催、②対面とオンラインの併用、③オンラインのみの開催の３つの開催形式に対応できるよう準備を進めています。

会員のみなさまへのお誘いについて掲載しました

IAHR(Association for Hydro-environment Engineering and Research、日本の水工学者が最も参加している国際学会です）が発刊している　The Journal of Ecohydraulics (TJoE)の Editor-in-Chief を務める浅枝埼玉大学名誉教授から TJoE への論文投稿のお誘いがあります。

２　応用生態工学会第 24 回総会報告

報告者：応用生態工学会　事務局長　青江　淳

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、2020 年度の第 24 回総会については、例年の対面とメール・FAX・郵送による委任状提出の併用に替えて、ホームページに掲載した総会議案に対する質問・意見・賛否をメール・FAX・郵送にて回答していただく方法で開催いたしました。

審議の結果は下記のとおりです。

9 月 17 日現在の正会員数 860 名のうち、313 名から回答が提出されました。総会の成立要件の 172 名を超えましたので第 24 回総会は成立いたしました。

【参考】

学会規約第 15 条第 4 項

総会は正会員の１／５の出席によって成立する。

審議事項に対する回答結果は次のとおりです。

2-1(1)		2-1(2)		2-2		2-3		2-4	
承認	非承認	承認	非承認	承認	非承認	承認	非承認	承認	非承認
313 名	0 名	313 名	0 名	313 名	0 名	313 名	0 名	313 名	0 名

2-1(1)　第１号議案（１）　2019 年度決算報告
2-1(2)　第１号議案（２）　2019 年度監査報告
2-2　第２号議案　災害調査引当資産の補充
2-3　第３号議案　2021 年度事業計画案
2-4　第４号議案　2021 年度予算案

上記に示すとおり、審議事項はすべて承認されました。

回答の中で下記のご意見等をいただきましたので合わせて報告いたします。

議案	ご意見等
1-1	・会員数の減少に応じた賛助会員の口数増加で維持されていることがわかるので、個人会員（特に学生会員）の増加に向けた対策や学会サービスの充実案などについて考えがあれば伺いたい。 ・査読日数については、平均値ではなくばらつきについても提示してほしい。そのうえで編集者からの依頼後の査読日数があまりに多い査読者については、その選定を避ける等してほしい。

	・全体的に幅広く学会活動が行われていると感じました。
	・資料２会員状況報告の P7 の(3)賛助会員のところの４行目で「現在では 43 法人 62 口」とありますが、「現在では 44 法人 63 口」なので修正願います。
2-1	・若い世代の研究者、実務者を育成するカリキュラムの強化をお願いします。
2-2	・調査団のこれまでの実績情報に照らして、金額の検討があるとよりわかりやすいと思います。
2-3	・共催行事については、その内容などがニュースレターで解説されると情報収集に役立つのでうれしい。 ・座学については、将来的には映像配信も含めて多くの機会が提供されると、学会お魅力の増加につながると思います。
	・若い世代の研究者、実務者を育成するカリキュラムの強化をお願いします。
	・新型コロナ禍においても充実した内容の活動が続けられることを期待します。
2-4	・若い世代の研究者、実務者を育成するための予算を重点配分していただければ、会費を納めている会員として納めがいがありますので、ご検討をお願いします。
その他	・コロナ対応では臨時にやるもののほか、継続的にシステム、ライフスタイルを変えていくものもあります。学会活動もその辺を選別して、コロナ禍で停滞した活動を再活発化できるよう頑張りましょう。
	・沿岸域や海岸の分野も強化いただけると幸いです。沿岸環境関連学会連絡協議会へのご参加につきまして、あらためてご確認やご検討をいただけたら幸いです。平成１２年に設立された協議会で、応用生態工学会も参加されています。よろしくお願いいたします。
	・学会活動のさらなる普及のためにも、地域研究会活動が今後も活発化することを願います。
	・事業計画、予算配分とも若い世代への投資を意識した運営を継続すれば、学会が発展していくと考えます。若い世代が魅力を感じる学会運営をお願いします。
	・web の総会も参加人数が確保できるなら、有効なやり方かもしれません。
	・コロナで難しい状況ですが、こういう状況を逆手になにかやれるといいですね。 引き続きよろしくお願いいたします。
	・オンラインでの発表会の開催ありがとうございます。遠方からも参加しやすく助かります。
	・新型コロナウイルス感染拡大の状況でございますが、引き続き、ご指導、宜しくお願い申し上げます。
	・会員あてメール（【重要】応用生態工学会第 24 回総会の回答提出の再度のお願い）が、宛先欄にメールアドレスが入って全員見える状態になっていました。重大な個人情報流出事故だとおもいますので、早急に対応をお願いします。
	・会員数がほぼ安定しており、決算の収支もほぼ均等、コロナ禍においても工夫して活発な活動が継続されていると思います。災害対応も今後も必要なことですので、2 号議案にも賛成します。 学会誌投稿数が減って、特集を組む必要があるのが気になります。

なお、回答提出の再度のお願いのメールの宛先欄にメールアドレスが入って全員見える状態になっておりましたことにつきましては、メールを送付した正会員のみなさまにお詫びと当該メールの削除を依頼しました。併せて再発防止に努めてまいります。

３　2020年度Web研究発表会報告

報告者：応用生態工学会東京　普及・連携委員
久保市浩右　応用地質（株）

本学会の 2020 年度 Web 研究発表会が 2020 年 12 月 5 日(土)に開催されました。当日参加者数は 324 名（ZOOMアクセス数)、研究発表は口頭発表53件でした。今年はCOVID-19感染拡大の影響をうけて、学会でもこれまでにない新しい様式による研究発表会でした。配慮が行き届かずご不便をおかけしたことがあったかもしれませんが、大きな混乱はなく、無事終えることができました。これもひとえに実行委員の皆様、学会本部の関係者、参加者の皆様のご支援の賜物です。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

1.Web 研究発表会開催の経緯

2020 年度(令和 2 年度)に予定されていた第 24 回北海道大会は、COVID-19 感染拡大防止に伴い延期することとなりました。理事会において、この延期決定に至るまでの議論の中で、延期はやむを得ないが、2020 年度の発表機会を失うことに対する救済措置を検討して欲しいとの意見が出されました。これを受けて幹事長より、応用生態工学会東京に対し、Web 研究発表会の準備・運営の要請があり、令和 2 年 8 月 12 日に有志メンバーと情報サービス委員合同で ZOOM を使ったリモート会議形式の準備会を開催しました。

準備会では，以下のような方針で進めることとしました。

- 「口頭発表」については、ZOOM ウェビナーを使用する。令和 2 年 8 月 6 日に応用生態工学会仙台が主催したフィールド報告会は同システムを使用しており、情報サービス委員会で運営実績がある。一方で ZOOM は、一般や多くの企業で参加可能なツールであるが、国土交通省内では使用が制限されているなど、一部で参加できない団体もあるため、YouTube 配信など代案も考えておく必要がある。
- 「ポスター発表」については、別途システムを導入する必要もあり、運営が複雑になるため、今回の Web 研究発表会では実施しない。
- 「発表賞」は、研究発表会表彰委員会と相談して実施する方向で検討する。
- CPD 認定プログラムの申請は、建設コンサルタンツ協会の要綱に沿って実施する。受講証明書の発行にあたっては、参加人数が多くなると受講証の発行、配信の事務作業が大変負荷になる。負荷を軽減するため、機械的に受講書作成、配信ができるツールを情報サービス委員会で作成する。

以上のような方針と当日に向けたスケジュール、役割分担を決めて、準備を進めてまいりました。

2.研究発表会概要

2020 年度 Web 研究発表会の日程は以下のとおりです。

＜日時＞　令和 2 年 12 月 5 日（土曜日）　9:00～17:30　【ウェビナー開催】
＜会場＞　オンライン特設会場（ZOOM ウェビナー2 会場，YouTube での Live 配信も併用）
　　運営事務局会場：紀尾井カンファレンス（東京都千代田区紀尾井町 1 番 4 号）
＜プログラム＞
　8:45 ～ 8:55　開会あいさつ　（甲村会長）
【第１会場】
　9:00～10:30　＜セッションＡ＞河川環境（１）　発表６件
　10:30～10:45　＜　休　　憩　＞
　10:45～11:15　＜セッションＡ＞河川環境（２）　発表２件
　11:15～12:15　＜セッションＢ＞河川地形　　発表４件
　12:15～13:15　＜　休　　憩　＞

13:15～14:30　＜セッションＣ＞植生　　発表５件
14:30～14:45　＜　休　　憩　＞
14:45～16:00　＜セッションＤ＞ハビタット　　発表５件
16:00～16:15　＜　休　　憩　＞
16:15～17:30　＜セッションＥ＞環境ＤＮＡ　　発表５件

【第２会場】
9:00～10:00　＜セッションＦ＞産卵場　　発表３件
10:00～10:45　＜セッションＧ＞魚類（１）　　発表４件
10:45～11:00　＜　休　　憩　＞
11:00～12:00　＜セッションＧ＞魚類（２）　　発表４件
12:00～13:00　＜　休　　憩　＞
13:00～14:00　＜セッションＨ＞底生動物（１）　発表４件
14:00～14:15　＜　休　　憩　＞
14:15～15:30　＜セッションＨ＞底生動物（２）　発表５件
15:30～15:45　＜　休　　憩　＞
15:45～17:15　＜セッションＩ＞その他　　発表６件

【夜の部】
18:00～　　若手の会、フリートーク交流会（応用生態工学会／若手の会主催）

※研究発表会については、YouTube オンデマンド配信を１月末まで公開。

3. 研究発表

(1) 発表件数等

研究発表件数は、口頭発表のみでしたが53件でした。発表件数を第14回札幌大会から第23回広島大会まで(第16回、第21回は３学合同大会のため比較の対象外とした)と比較すると、以下のように推移しており、今年はポスター発表がなかったため、全体の発表件数は減少しましたが、口頭発表はこれまでより10件程度多くなりました。

大会名	口頭発表件数	ポスター発表件数	合計
第14回札幌大会	36	68	104
第15回金沢大会	43	50	93
第17回大阪大会	45	70	115
第18回東京大会	45	73	118
第19回郡山大会	47	75	122
第20回東京大会	45	75	120
第22回東京大会	41	71	112
第23回広島大会	42	71	113
2020年度Web研究発表会	**53**	**－**	**53**

(2) 優秀発表賞

発表賞の審査員は、当日参加する会員の中から役員及び役員経験者、学識者等から任意に選出し、審査を依頼しました。審査員には設定した評価項目毎に採点していただき、事務局で点数を集計しました。発表賞辞退者を除く上位10件を「優秀発表賞」に選定し、これらのうち、最も点数が高かった発表を「最優秀発表賞」としました。

受賞研究発表は、以下のとおりです。選ばれました発表者のみなさま、おめでとうございます。

＜最優秀発表賞＞

OE-2 環境 DNA によるイワナ在来個体群判定用プライマーの開発
※玉田貴（㈱環境総合リサーチ）・芝田直樹（同）・澤樹征司（㈱建設技術研究所）・大須賀麻希（同）・堀裕和（同）・堀田大貴（同）

＜優秀発表賞＞

OA-1 河川合流部の生態的機能と保全方策
※原田守啓（岐阜大学）・永山滋也（同）・河口洋一（徳島大学）・萱場祐一（土木研究所）

OB-1 幅広い流況下における砂州動態の簡易な分析手法～長良川における検討事例～
※平野和希（岐阜大学）・原田守啓（同）

OD-3 イシガイ類・タナゴ類が生息する小河川の連続性・接続頻度の分析
※土方宏治（大日コンサルタント㈱）・原田守啓（岐阜大学）

OE-1 地域の生態系に配慮した魚道整備・維持管理に向けた取り組み
※大須賀麻希（㈱建設技術研究所）・戸田満（国交省湯沢砂防事務所）・樫田司紀（同）・笛木久美（同）・澤樹征司（㈱建設技術研究所）・堀裕和（同）・柴田閑（同）

OE-3 環境 DNA 手法を用いた高津川流域における魚類相の網羅的・定量的な評価
※中尾遼平（山口大学）・乾隆帝（福岡工業大学）・辻冴月（山口大学）・齋藤稔（同）・赤松良久（同）

OF-2 河川湧水が卵・仔魚期サケ（Oncorhynchus keta）に及ぼす負の影響
※山下祥平（北海道大学）・根岸淳二郎（同）・有賀望（札幌市豊平川さけ科学館）・中川智裕（北海道大学）・Mo Zhengwei（同）

OG-7 環境 DNA 分析による江の川支流のアユ生物量に影響を与える環境要因の検討
※宮園誠二（山口大学）・児玉貴央（同）・赤松良久（同）・中尾遼平（同）・齋藤稔（同）・辻冴月（同）

OH-1 千曲川中流域におけるカゲロウ類の二次生産力の推定―現存量法を用いて―
※平林公男（信州大学）・石川史弥（同）・大塚健斗（同）・岡田俊典（同）

OH-2 平地河川における出水攪乱が底生動物の群集動態に及ぼす影響
※上田航（愛媛大学）・福崎健太（同）・三宅洋（同）

OI-7 北海道で繁殖するオオセグロカモメを対象とした洋上風力発電センシティビティマップ
※佐藤夕夏（帯広畜産大学）・赤坂卓美（同）・藪原佑樹（徳島大学）・風間健太郎（早稲田大学）・河口洋一（徳島大学）

「※」は発表者を示す。

4. 謝辞

みなさまのご協力により Web 研究発表会を開催し、無事終了することができました。

準備期間が短かったにも関わらず、ご尽力いただいた関係者の皆様には、ご多忙の中、準備や当日運営にご尽力いただきました。あらためて深く感謝いたします。特に今回はコロナ禍で、前例もなく、これまでの経験が通用しない運営でしたが、実行委員で知恵を絞り、実現に漕ぎつけました。まだ続くコロナ禍では、今回のような Web を活用したイベント運営が主流になるものと思われます。今回の研究発表会の準備・運営での反省点や改善案について、今後開催される次回大会や地域イベントの運営に活かされるよう引き継ぎたいと思います。

最後に、2020 年度 Web 研究発表会の準備、運営に関わった実行委員・スタッフを紹介して、 Web 研究発表会のご報告を終わらせていただきたいと思います。

【実行委員・スタッフ】

実行委員（五十音順）：相崎優子(八千代エンジニヤリング(株))、五十嵐美穂(日本工営(株))、浅見和弘(応用地質(株))、大杉奉功((一財)水源地環境センター)、沖津二朗(応用地質(株))、久加朋子(北海道大学)、久保市浩右(応用地質(株))、島村彰((株)建設環境研究所)、東海林太郎(パシフィックコン

サルタンツ(株))、西浩司(いであ(株))、前田範章(国際航業(株))
学会事務局：北村匡（幹事長)、青江淳（事務局長)、久保田あつ子（事務局)

４　第 24 回札幌大会の企画

報告者：札幌大会実行委員会　副委員長
渡邊恵三　（株）北海道技術コンサルタント

2021 年札幌大会実行委員会では、①対面のみの開催、②対面とオンラインの併用、③オンラインのみの開催の３つの開催形式に対応できるよう準備を進めている。

例年のような活気ある対面形式①とオンラインを併用した対面形式②が開催できるように、大会日程と会場を以下のように決定した（第 108 回理事会承認　2020 年９月 24 日～28 日電子メールを利用した会議)。

１．大会日程

2021 年９月 22 日（水祝）～25 日（土）
(21 日 or 26 日にエクスカーションを予定)

９月 22 日（水祝）自由集会（北海道の話題を中心に）／札幌教育文化会館
９月 23 日（木）　研究発表会（ポスター発表)、自由集会 ／札幌教育文化会館
９月 24 日（金）　自由集会、研究発表会（口頭発表)、懇親会／札幌教育文化会館
９月 25 日（土）　総会、公開シンポジウム ／ 札幌エルプラザホール
９月 21 日（火）or ９ 月 26 日（日）　エクスカーション／札幌市近郊

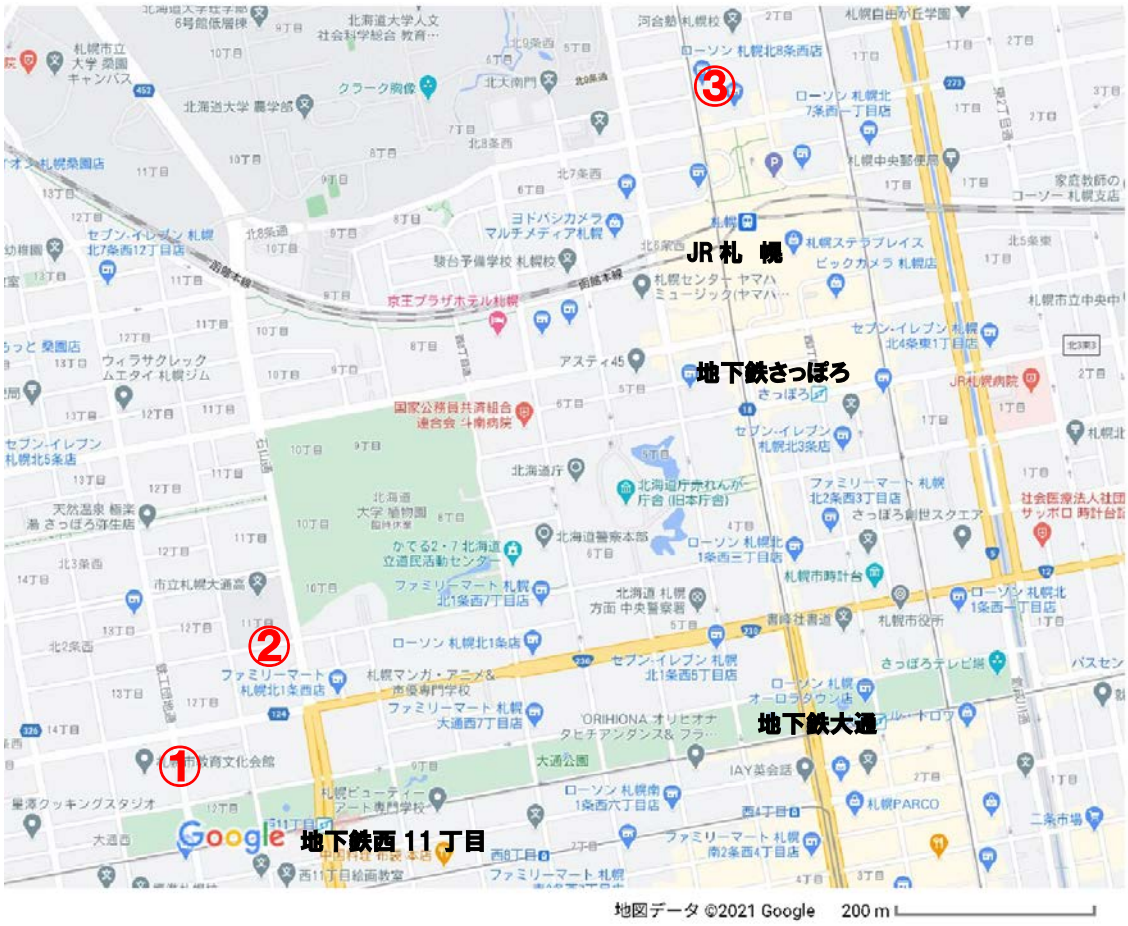
※研究発表会（口頭発表、ポスター発表)、自由集会については、上記日程の中で前後する可能性がある。

2. 会　場

①研究発表会、自由集会：2021 年９月 22 日～24 日
・札幌市教育文化会館　３階・４階（研修室・講堂・ギャラリー)
札幌市中央区北１条西 13 丁目
・JR 札幌駅からのアクセス　（徒歩 25 分：1.8 ㎞)
札幌市営地下鉄南北線「さっぽろ駅」より乗車、「大通駅」にて東西線に乗り換え「西 11 丁目」駅、１番出口から徒歩５分

② 懇親会：９月 24 日
・ホテル ロイトン札幌
札幌市中央区北１条西 11 丁目
・札幌教育文化会館から徒歩３分（250m)
・JR 札幌駅からのアクセス
札幌市営地下鉄南北線「さっぽろ駅」より乗車、「大通駅」にて東西線に乗り換え「西 11 丁目」駅、１番出口から徒歩３分

③公開シンポジウム： ９月 25 日
・札幌エルプラザホール
札幌市北区北８条西３丁目
・JR 札幌駅からのアクセス
JR「札幌」駅北口から徒歩約３分



会場位置図

①札幌教育文化会館（研究発表会・自由集会）

②ホテルロイトン札幌（懇親会）

③札幌エルプラザ（公開シンポジウム）

５　行事開催報告

5.1 応用生態工学会仙台　『仙台湾南部海岸環境追跡プロジェクト　～東日本大震災後の海岸堤防について～』フィールド調査（R1 報告会）

報告者：応用生態工学会仙台　普及・連携委員
佐藤高広　（株）復建技術コンサルタント

応用生態工学会仙台では、東日本大震災から 10 年の節目を想定し、昨年度に引き続き、仙台湾南部海岸の海岸堤防に着目したフィールド調査を実施しました。なお、本取り組みは今回の調査だけで終了ではなく、今後も継続していく計画であります。

1. 開催趣旨

仙台湾南部海岸では、平成２３年３月に発生した東日本大震災の津波災害後の海岸堤防の復旧・復興において自然環境への配慮の観点から様々な影響緩和を行うとともに、『緑の防潮堤』等のより前向きな事業も進めてきました。海岸堤防の復旧・復興に関する影響緩和効果については、施工後数年の事業者によるモニタリング調査においてその効果が確認されていたが、復旧・復興事業が完了したことによりモニタリングも修了し、その後の経過が分からなくなりつつあります。応用生態工学会仙台では、海岸堤防の復旧・復興後の環境変化に関して応用生態工学的な側面から長期的にモニタリングを実施し、今後の海岸堤防等の計画・設計の在り方、海岸堤防設置時の環境保全の具体的方法等についての知見を収集し、幅広く発信することを企画しています。また、わが国には、河川・海岸地域における災害復興や国土強靭化における生態系機能の活用事例が少ない中で、仙台湾南部海岸の防潮堤と生態系回復状況の事実を周知させることは、被災地域で取り組んでいる者の責務であると考えます。

また、仙台市エリアでは NPO による市民活動として、仙台湾南部海岸をフィールドとして定期的なフットパスを開催していることから、将来的には、このような団体にもご参加頂き、環境モニタリングを地域イベントとして実施することも予定しています。今年開催するイベントはそのための予備的な調査としての位置づけでもあり、今後、専門家と市民が参加することにより持続的に実施可能な砂浜環境のモニタリング方法の確立に資することを目的としています。

以上を踏まえて令和元年 8 月 31 日に 1 回目のフィールド調査を実施しました。その結果は、令和 2 年 8 月 6 日の報告会で参加者と情報を共有しました。今年度は 2 回目のフィールド調査として、昨年度の経験を踏まえ、海岸堤防周辺の環境調査を実施し、海岸堤防設置に関する環境保全に係る知見の収集に努めるものです。

2. 実施体制･参加者内訳等

主催：応用生態工学会
協賛：(一社)東北地域づくり協会
後援：国土交通省東北地方整備局・ 宮城県・(一社)建設コンサルタンツ協会東北支部
実施主体：応用生態工学会仙台

3. フィールド調査の実施状況

【フィールド調査の実施状況】実施日：2020 年 8 月 29 日（土）
9：30～10：00　　趣旨説明・調査方法説明
10：00～12：00　現地調査：植物・昆虫類・物理環境の各班で
　　調査を実施（専門性の高い調査を実施）

●具体的な調査内容：次ページに実施状況写真を示す。
(1)植物班：①注目種調査　②コドラート調査
(2)昆虫班：①トラップ調査　②センサス調査

(3)物理班：①土壌物性調査(硬度・水分・断面)
②UAV 撮影(事前実施済み)　※調査結果の詳細については、現在、整理中

12：00～13：00　昼食
13：00～15：00　現地調査（午前の続き)、調査結果の整理
15：00　解散

※R2 は新型コロナへの感染対策を行う必要があることから、調査規模を縮小し、かつ、調査に当たっては以下の基本方針を遵守することを原則とした。

・各班最低限の人数を確保し、昨年度調査との連続性も意識した上で、当該人員で可能な調査デザインとする。
・物理、植物、昆虫の各班は個々に調査を実施し、現地での接触を避ける。
・班はなるべく少人数とし、人数が増えた場合には同一コンサルタントのメンバーを一つのチームとし、日頃接触のない人との作業を避ける。
・各班は同一時間帯での調査を避ける。
・同一時間帯での調査となった場合には、異なる調査箇所で調査を実施する。もしくは、汀線側、堤防側など十分距離を取って調査を実施する。

5. おわりに

本大会の運営においては、大学関係者、東北地方整備局、宮城県、東北地域づくり協会、多くのコンサル会員の協力により実行することができました。運営にご協力いただいた応用生態工学会仙台の実行委員の皆様に心より感謝申し上げます。

今年の 3 月で東日本大震災から 10 年が経過し、復興事業の進捗も進む中、海岸堤防の在り方について生態系及び海岸管理上の現状と課題等について知見を集積することは、震災後のか海岸生態系の回復の理解につながり、今後の適正な海岸堤防の管理の実現に大きく寄与しており、有意義なデータが取得できました(調査結果のとりまとめは現在実施中)。なお、本成果を取りまとめて、応用生態工学会としての研究のあり方、市民参加を想定した調査手法、今後の河川・海岸環境保全の在り方についてなど、今後の研究や活動の方向性について次年度以降の調査方針を検討し、震災 10 年の節目に向けたイベント企画につなげていきます。

写真１　R2 仙台湾南部海岸フィールド調査の実施状況

調査前のミーティング実施状況
(海岸公園センターハウス（荒浜地区）前)

植物調査の実施状況
(コドラート調査)

植物調査の実施状況
(コドラート調査)

昆虫調査の実施状況
(トラップ回収状況)

昆虫調査の実施状況
(トラップ捕獲状況)

物理環境調査の実施状況
(土壌硬度の測定)

物理環境調査の実施状況
(土壌水分の測定)

植物・物理環境調査の実施状況
(土壌断面の根と水分確認)

【令和 3 年 震災 10 年のシンポジウムに関する予定】
（仮称）『東日本大震災からの再生～沿岸環境の変化 10 年と今後の課題』

●開催予定：令和 3 年 3 月 27 日（土曜日）13:00～17:30
●場　　所：東北大学片平キャンパス生命科学プロジェクト棟 講義室より WEB ライブ発信
（市営地下鉄東西線：青葉通り一番町）
※会場参加者は 40 名まで(講師と事務局学会メンバー含む)に限定
●主　　催：応用生態工学会 仙台
●協　　賛：三井物産環境基金、アースウオッチ・ジャパン
●共　　催：日本生態学会東北地区会、日本景観生態学会、植生学会，自然環境復元学会
東北大学生態適応センター、日本ベントス学会自然環境保全委員会、
●後　　援：国土交通省東北地方整備局、 宮城県、仙台市、(一社)日本環境アセスメント協会東北支部、
（一社）建設コンサルタンツ協会東北支部　などに要請予定

■ プログラム

13:00-13:05 ご挨拶　　占部先生(東北大学・学会副会長)
13:05-13:10 趣旨説明　佐藤（仙台普及連携委員・学会幹事）

【事例報告】　13:10～15:15（各 25 分）
司会：丸尾知佳子 東北大工学部

講演１　13:10-13:35
黒沢高秀　福島大学共生システム理工学類
「津波浸水域の植物の種多様性の震災影響とこの 10 年の変化」
講演２　13:35-14:00
岡浩平 広島工業大学環境学部
「大津波から蘇る砂浜海岸エコトーンのレジリエンス」
講演３　14:00-14:25
金谷弦 国立環境研究所地域環境研究センター
「蒲生干潟における環境・植生・底生動物のうつりかわり－震 災後 10 年間の変化」
講演４　14:25-14:50　岩手医科大学教養教育センター　教授
松政正俊「岩手県沿岸の汽水域の変化：特に宮古湾と広田湾の干潟について」
講演５　14:50-15:15
占部城太郎　東北大学生命科学研究科
「井土浦と東谷地の 10 年：復興工事と保全の隘路」

15:15-15:30 休憩

【パネルディスカッション】15:30～17:30
◆議　題「東日本大震災からの再生～沿岸環境の変化 10 年と今後の課題」
〇東日本大震災前後の沿岸環境と 10 年経過後の状況について、各コメンテイターがトピックスを 5 分程度で話題（課題）提供
〇それを踏まえて、事例報告者・コメンテイターを含めて座談会形式で、震災の影響やその後の生態系変遷についてわかったこと、今後の課題などを議論

◆ファシリテイター　　：竹門康弘　京都大学防災研究所
◆リアルタイムライター：高橋真司　東北大工学研究科
◆コメンテイター　　：萱場祐一　土木研究所研
佐藤慎一　静岡大学理学部

鈴木孝男　みちのくベントス研究所
平吹喜彦　東北学院大教養学部
松島　肇　北海道大学農学研究院

・参加申込み：学会サーバで申込アドレスを作ります。（または takahiro@sendai.fgc.co.jp）
・応用生態工学会 HP に案内チラシ PDF，申込みアドレスを掲示します。https://www.ecesj.com/
・①氏名，②所属，③e-mail，④参加型式：会場（定員 40 人：講演・事務局含む）or ZOOM ウェビナー（定員 500 人：事務局を含む）
・締切り令和 3 年 3 月 19 日（金）※ 定員になり次第締め切ります

※参加者の方には、ウェビナーの URL、パスワード等を、メールでご連絡いたします。ウェビナー映像は、YouTube で同時配信します。また、ウェビナー映像は後日、応用生態工学会が YouTube 等で公開する場合があります。YouTube の URL につきましては、日が近くなりましたら、応用生態工学会のホームページに掲載いたします。

※会場・ウェビナー参加者で希望のある方に対しては、応用生態工学会が受講証明書を発行いたします。ウェビナー参加者の受講証明書は、ZOOM のログファイルで事務局が設定する時間以上の参加を確認できた方にのみ、発行いたします。

5.2　応用生態工学会福岡　2020 九州地区事例・研究発表会　開催報告

報告者：応用生態工学会福岡　普及・連携委員
齋藤　剛　西日本技術開発(株)

1. 開催趣旨

九州地区における応用生態工学の普及や産学官民の連携強化などを目的に、九州地区事例・研究発表会を開催しました。今回は、流域治水や平成29年7月九州北部豪雨後の川づくり、九州地区の最新の事例・研究について、幅広い分野からご発表いただきました。なお、コロナ禍の中での開催となりましたので、感染拡大防止を考慮しZOOMウェビナー形式での開催となりました。

2. 開催内容

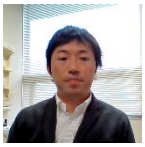
【日　　時】令和 2 年 12 月 17 日(木)13：00～17：20
【方　　法】ZOOM ウェビナー
【参加人数】159 名
【発表タイトル・発表者】※敬称略
■流域治水と豪雨災害後の川づくり　島谷幸宏(九州大学)
■赤谷川災害復旧事業における配慮事項　遠山哲生(筑後川河川事務所九州北部豪雨復興出張所)
■H29年豪雨による桂川復緊事業における生態保全の取組み　堤祥亮(朝倉県土整備事務所災害事業センター)
■伝統技術による石畳堰の水理模型実験　兒玉健佑(九州大学)
■河川堤防に繁茂するセイバンモロコシの抑制技術について　山根　明(西日本技術開発株式会社)
■河川におけるニホンウナギの生息環境と遡上能力について　松重一輝(九州大学)
■種の保存法指定種ハカタスジシマドジョウの生息状況　柞磨佑紀(九州大学)
■環境DNAメタバーコーディングの空間解像度調整に関する検討～フィルターの粒子保持径に着目して～　乾隆帝(福岡工業大学)

■環境DNA分析を用いたカゼトゲタナゴ検出法の確立　百冨修平（九州大学）
■写真測量による球磨川河口干潟の地形変化について 伊豫岡宏樹（福岡大学）
■カブトガニ幼体の生息適地となる干潟の推定～福岡県の生息地を対象として～ 小山彰彦（熊本大学）

島谷幸宏

遠山哲生

堤祥亮

山根明

乾隆帝

伊豫岡宏樹

小山彰彦

3. おわりに

これまでの発表会では、ほとんどの出席者が福岡県や近隣県の方でしたが、今回は北海道から沖縄まで遠方の方にもご参加いただきました。皆様に直接お会いできないことは大変残念ですが、WEB の強みを活かして今後の活動の幅を広げていきたいと思います。

最後に、ご発表いただいた皆さまを初め、関係者の皆さまには多大なご協力を賜りました。また、ウェビナー操作のご指導をいただきました情報サービス委員長の沖津二朗様には、準備段階からご支援をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ウェビナーホスト会場の様子

5.3　応用生態工学会札幌　テキスト勉強会「河道内氾濫原の保全と再生」

報告者：応用生態工学会札幌　普及・連携委員
渡邊恵三　（株）北海道技術コンサルタント

（開催概要）

令和元年 9 月に刊行された“応用生態工学会テキスト「河道内氾濫原の保全と再生」”の勉強会を開催し、多くの方々にテキストの活用を図っていただく機会を設けました。

テキストの解説は、コラムも含め、北海道内在住の出筆者の方々を主にお願いしました。講演者の方々には、テキストの解説に留まらず、事例のその後、北海道内の関連する事例や話題、現在の研究内容など、北海道らしい勉強会となりました。

日　時：2020 年 12 月 10 日　13：30～17：00
形　式：対面（会場定員の 1/3 を目途に募集）＋オンライン（Zoom ウェビナー）
場　所：札幌市教育文化会館　4 階講堂（札幌市中央区北 1 条西 13 丁目）
参加者：会場・対面　　40 名
　　：オンライン　 110 名
参加費：　無　料
その他：土木学会　CPD 認定プログラム
主　催：応用生態工学会札幌
共　催：応用生態工学会テキスト刊行委員会, 北海道大学大学院森林生態系管理学研究室
講演内容・講師
「開催あいさつ」
　河口 洋一（徳島大学大学院社会産業理工学研究部）
「テキストの説明　［全般］　」
　永山 滋也（岐阜大学地域環境変動適応研究センター）
　根岸 淳二郎（北海道大学地球大学院地球環境科学研究院）

「氾濫原依存淡水魚種の現状[コラム 4]　」
　　三浦 一輝（斜里町立知床博物館）
「流路網が代替する後背湿地の連結性[コラム 5]　」
　　石山 信雄（北海道立総合研究機構・林業試験場）
「保全と再生の実践　札内川の事例[4.2 日本国内における事例]　」
　　中村 太士（北海道大学大学院農学研究院）

以下に、各講師の方々の解説・話題提供に対する参加者の感想等を抜粋しました。

永山滋也・根岸淳二郎
「テキストの説明　[全般]　」

・氾濫原として、中小河川の合流部が対象となりえる考えが興味深かった。合流部は治水計画上、流下能力で断面形状が決まるため、環境の視点も加わると積極的な河川計画として設計・施工されることが期待される [S さん]。
・氾濫原は多様な環境から、生物の現存量、多様性に大きく寄与している。かつて沖積平野に広く分布していたが、多くの河川で整備が進み、堤防の堤外地に残る程度となった。中でも特に河川合流部では、多くの動植物の生息環境あるいは出水時の避難場所として機能している。本書が執筆された以降で得られた知見も多く、今後、生物多様性を考慮した河川整備を進めるにあたり、これまでの知見に加えて、まだ考慮すべき事象が潜在している分野であると感じた [K さん]。

・氾濫原は生物多様性への貢献度が高い河川景観要素である。しかし、現在、その範囲は堤外地（河道内）に限定されるとともに、河道掘削や河道内樹木伐採などの様々な人為的要因による物理環境の変化を介した生物生息場機能の劣化が懸念されている。多くの直轄河川区間は、本来、広大な氾濫原を有する中下流部に位置する。以上を踏まえ、河道内氾濫原の適正な管理は、河川の動植物の生息・生育及び繁殖環境を考慮した河川整備にとって重要であることを改めて認識し、今後の業務に活かしていきたいと考えます[K さん]。
・テキストの記載されていなかった‘河川本流と支流との合流部の生態的機能は空間的に多様な環境を有している。’ことは、魚種が多く河床底質組成や植生が多様に富むなど私自身が現地調査で体感していることであり、改めて勉強になりました[S さん]。

石山信雄
「流路網が代替する後背湿地の連結性[コラム 5]」
「河道外・氾濫原での湖沼ネットワーク管理」

・堤内の湖沼は流路によってネットワークが形成されている箇所ほど魚類の種数や遺伝的多様性が高まるが、一方で外来種モツゴの侵入によって絶滅の恐れがあるヤチウグイが減少するのでヤチウグイの保全のためには水深が深く孤立した湖沼も重要である[N さん]。
・氾濫原のメタ個体群分析については、外来種との関係に加えて個々の種のライフサイクルと依存環境についても詳細な検討を行えば別の視点が得られるのではないかと感じた。
・湖沼ネットワークと分断化については、トレードオフであり、私のフィールドにおいて議論している考え方に大きく参考になりました[M さん]。

三浦一輝

「氾濫原依存淡水魚種の現状[コラム 4]　」

「カワシンジュガイの世界　～魚にくっつく二枚貝がいる？～」

・北海道にも生息するカワシンジュガイという二枚貝の不思議な生態や河川環境保全に果たす役割についての解説は、河川技術者にとって非常に興味深いものであった。特に、カワシンジュガイが北海道のアイヌ食文化やアイヌ語地名の語源となっている事や、河川環境保全（良好な水質維持、魚類の生息環境維持等）に果たす役割の大きさについて学ぶ事が出来た［0 さん］。

・テキストに記載がなかったカワシンジュガイの研究報告は、カワシンジュガイが河床の流出を抑止し、底質に含まれる有機質を河床に止めることでカワヤツメ幼生の生息場を提供するなど両種の共生関係を明確にしており、非常に勉強になりました[S さん]。

・カワシンジュガイの総説は生態的なものにとどまらず、歴史・文化にもおよび、今後業務で保全を検討するモチベーションの向上にもつながりました[S さん]。

中村太士

「保全と再生の実践　札内川の事例[4.2 日本国内における事例]　」

「グリーンインフラは環境と地域経済を豊かにする」

・氾濫原の変化は水（流量）と緑（植生）と土（移動土砂）のバランスの変化である。氾濫原は動的環境なので、広い範囲で変化をとらえなければならない。河道内に局所的に氾濫原環境を造成しても、固定的だと 10~15 年で劣化する。ダムの人工放流による氾濫原環境の再生と保全（砂礫河原の再生、維持など）は自然の増水のリズム（時期）に合わせることが重要である[N さん]。

・技術的な話のほか、自分は何を保全したいのか、そして「5 年、10 年言い続ければ変わる」（だから皆さんも努力しなさい）というお話には感銘を受けました[T さん]。

・中村先生がおっしゃった、今あるものを壊すのではなく、今ある状況の中でできることを探してやっていく、声を上げ続けるという言葉が心に残りました。少しでもより良い環境になるよう、自然と共生できるよう提案していけたらと思いました[K さん]。

（後　記）

2021 年札幌大会の会場と同じ会場での対面とオンラインの併用による開催を試行しました。対面＋オンラインの開催は、会場音声の配信が課題でしたが、情報サービス委員会沖津委員のご協力により音質良く配信することができました。講演終盤にはオンライン配信の音声が一時途絶えるトラブルがあった以外は、順調な進行だったと思います。運営に関わった札幌大会実行委員会のみなさま、ありがとうございます。

この勉強会は、当初、4 月 17 日の開催を予定したが、緊急事態宣言の発令により延期。感染拡大の落ち着きを鑑みて 12 月の開催を計画しました。しかし、開催日が近づく 11 月下旬、札幌では、感染が拡大し、警戒ステージ 4 相当とする集中対策期間となり、また、GoTo トラベルの対象外にもなりました。このような状況のなかでしたが、会場（対面）では、感染拡大の対策の徹底と会場席数の 1/3 の定員で実施しました（懇親会も断念しました）。

また、オンライン配信により、道外遠方の方々に多く参加いただき、遠方の近さを感じした。一方で、オンラインでは伝わらない会場の臨場感、会ってこその対話の大切さを実感しました。

2021 年 9 月、札幌でお会いできることを願って。

会場の様子

オンライン画面

オンライン配信スタッフ

運営スタッフ・講演者

６　理事会・幹事会報告

6.1　第 108 回理事会（メール会議）報告

第 108 回理事会（メール会議）が昨年 9 月 24 日～28 日に開催された。

第 108 回理事会での審議事項と審議結果は次のとおり。

①来年の応用生態工学会第 24 回札幌大会の開催計画について

本年の札幌大会の開催については、新型コロナウイルス感染の収束の見通しが依然不透明な状況にあることから、５月 14 日～20 日開催の第 105 回理事会（メール会議）では 1 年間の延期を決定した。８月 31 日～9 月 7 日開催の第 107 回理事会（メール会議）では、対面のみの開催、対面とオンラインの併用、オンラインのみの開催の３つの案について検討を進めることを決定した。

上記の方針決定を受けて、札幌大会実行委員会では、大会日程と会場について検討を進め、以下の案を作成した。

１．大会日程及び会場

9 月 22 日（水）	自由集会（北海道の話題を中心に）	札幌教育文化会館
9 月 23 日（木）	研究発表会（ポスター発表）、自由集会	札幌教育文化会館
9 月 24 日（金）	研究発表会（口頭発表）、自由集会、懇親会	札幌教育文化会館
9 月 25 日（土）	総会、公開シンポジウム	エルプラザホール
9 月 21 日（火）or　9 月 26 日（日）	エクスカーション	

※研究発表会（口頭発表、ポスター発表）については、上記日程の中で前後する可能性がある。

なお、関連学会の 2021 年度大会の日程との重複は現時点ではないことを確認している。

審議の結果、原案どおり承認された。

7　会員のみなさまへのお誘い

7.1　国際ジャーナルへの論文発表

浅枝　隆
Editor-in-Chief The Journal of Ecohydraulics
元 Editor-in-Chief　Landscape and Ecological Engineering

まず、なぜ、国際ジャーナルに論文を投稿しなければならないかを考えてみましょう。

大学や研究所関係者の間では頭の痛い話ですが、海外では、単に学会での口頭発表ではなく、国際的なジャーナルに掲載された論文でないと、論文として評価されないといった傾向にあります。欧米では、昔からそうした傾向にありましたが、最近は、アジアの発展途上国でもそうした国際的な基準が採用されています。海外の論文が増加傾向にあるにもかかわらず、日本からの論文数はむしろ減少傾向にあるといったニュースはよく耳にするところですが、化学や分子生物学といった日本が強い分野はともかく、応用生態工学会に関係する分野では、日本は非常に苦戦しています。図１は、応用生態工学に関係するものとして Aquatic Ecology と River Restoration という２つのキーワードで検索した、アジアの発展途上国から、2001 年以降だされたもの、比較のために、中国の代表として、北京師範大学、韓国の大学としてソウル大学、日本の二つの大学、海外の大手のコンサルタント会社からだされたジャーナル論文数を示しています。中国からの論文数は世界一ですから、比較の対象にはなりませんが、これまで開発途上国と思っていた国々からも、だされるジャーナル論文の論文数は急激に増えてきています。一つの機関あたりに直しても、この数分の１ですから、少なくはありません。ジャーナルの Editor は国際的な知名度で選ばれます。そのため、国ごとの国際的な知名度を測るには、こうしたジャーナルの Editorial Board にリストアップされている研究者の数が指標になります。図２は、応用生態工学と関係が深い分野で、世界的な視野で刊行されている 20 のジャーナルから取り出したものの合計です。日本は、現時点では２位につけてはいますが、中国との差は歴然としており、他の国からも追い上げられています。こうした傾向は望ましいものではなく、海外で評価されるためには、国際的な知名度が高く、また、技術は、日本と異なり、論文として公表されていることが必要です。国内で知られているというだけでは、海外進出の際には大きな障害になってきます。

さて、特に河川工学関係者にはお馴染みの、IAHR(International Association for Hydro-Environment Engineering and Research) は、昨年で設立以来 85 周年を迎えました。水理学や河川工学で最も重要な国際学会であることはいうまでもありません。この IAHR にはいくつかの分科会があります。そのうちの一つが Ecohydraulics の分科会です。Ecohydraulics の分科会は、2018 年に ISE 2018 in Tokyo を開催したことで、記憶されている方も多いかと思います。IAHR では現在 Ecohydraulics を３つの重点課題の一つに掲げ強力に推進しています。

そうした中、Ecohydraulics の分科会が中心になって、2016 年より、The Journal of Ecohydraulics（TJoE）というジャーナルを出版しています。昨年 Vol.５が発刊されました。 TJoE では、Ecohydrauics を主たるフィールドとしていますが、純粋な Ecohydrualics のトピックに限らず、治水、土砂、管理等、水管理に関わる様々なトピックを対象にしています。IAHR が主催するということもあり、生態学的な内容に数式を多く用いたとしても全く違和感がないという特徴も備えています。逆に、生態学的な内容を河川工学の研究者に広めるには打ってつけのジャーナルといえます。

ジャーナルには、それぞれに特徴があります。例えば、応用生態工学会も一翼を担っている、ICLEE 主催の Landscape and Ecological Engineering(LEE)や、やはり IAHR から出版されている、Journal of Hydro-environment Research(JHER)は、もちろん読者は世界中に散らばっていますが、内容としては、東アジアに重点を置いたジャーナルです。TJoE は、元々ヨーロッパの研究者が中心になって出版されてきていますが、地域には拘らず、トピックを Ecohydraulics に重点を置いたものといえるでしょう。出版する主体の形態も様々です。Springer や Elsevier といった大手の出版社では、出版社自体が発行するジャーナルもあります。また、出版は大手の出版社に依頼していても、TJoE のように、世界規模の国

際学会が主催する場合、一つの国や地域に限定された組織が主催するものなど様々です。ジャーナルを発行する主体の形態によって、興味を示す読者層の分布も変わります。発行主体の規模が大きくても、読者の数が多くなるというものでもありません。こうしたことは、投稿するジャーナルを決める時には重要な要素になり、多様性は必要です。そうした観点から、LEE 共々、TJoE への投稿もお願いいたします。

【参考】The Journal of Ecohydraulics の URL　https://www.iahr.org/index/detail/53

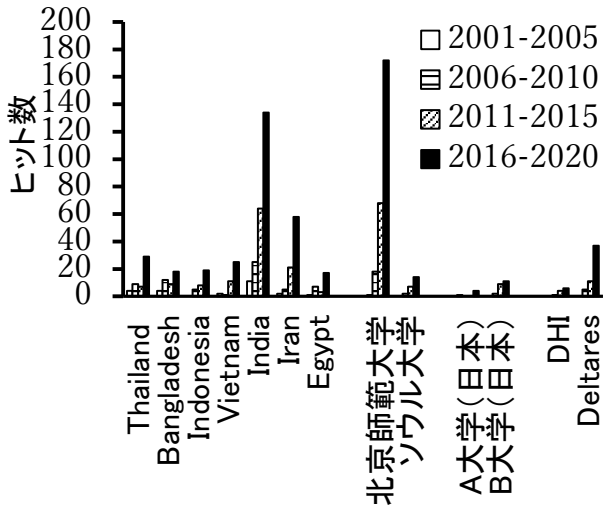


図１　Aquatic Ecology、River Restoration のキーワードに対するヒット数
（Web of Science より）

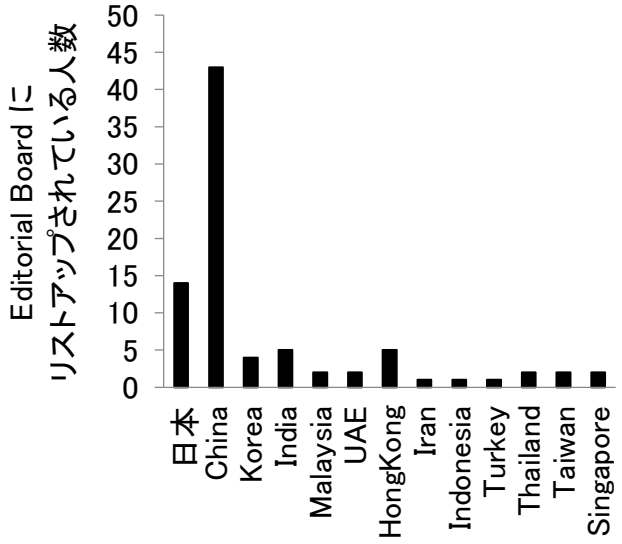


図２　応用生態工学に関係するジャーナルの Editorial Board にリストアップされている人数

8　2020 年度行事の経過と今後の予定

2020 年度(令和２年度)行事の経過と今後の予定

4.1	2020 年度（令和２年度）開始
4.3～6	国際交流委員会（メール会議），2020 年度海外学会等への派遣者 ⇒ 募集中止
4.17	第 24 回札幌大会第２回実行委員会 ⇒ 延期
4.17	応用生態工学会札幌 「氾濫原テキスト」勉強会 ⇒ 延期
5.14～20	第 105 回理事会（メール会議）
5.28～6.5	情報サービス委員会（メール会議）
5.21	第 24 回札幌大会の 1 年延期をホームページに掲載、会員に一斉配信
5.21	ニュースレター88 号発行
6.2～12	第 86 回幹事会（メール会議）
6.18～25	情報サービス委員会（メール会議）
6.23	編集幹事会（Web 開催）
7.29～31	2019 年度決算監事監査（書面検査）
7.30～8.5	第 106 回理事会（メール会議）
8.6	応用生態工学会仙台　フィールド調査令和元年度報告会（Web 開催） 『仙台湾南部海岸環境追跡プロジェクト～東日本大震災後の海岸堤防について～』
8.6	編集幹事会（Web 開催）
8.12	応用生態工学会東京　2020web 研究発表会　第１回準備会（Web 開催）
8.17	第 24 回札幌大会第２回実行委員会（web 開催）
8.18～25	情報サービス委員会（メール会議）
8.21～27	第 87 回幹事会（メール会議）
8.31～9.7	第 107 回理事会（メール会議）
9.14	国際交流委員会（Web 開催）
9.17～30	第 24 回総会（メール会議）
9.17	ニュースレター89 号発行
9.24～28	応用生態工学会 第 24 回札幌大会 ⇒ １年延期
9.24～28	第 108 回理事会（メール会議）
9.25	テキスト刊行委員会（Web 開催）
9.28	会誌「応用生態工学」Vol.23－1 発行
10.30	＜後援・応用生態工学会＞近畿地方整備局主催 令和２年度多自然川づくり近畿地方ブロック担当者会議（Web 開催）
12.5	応用生態工学会　2020 年度 web 研究発表会
12.10	普及・連携委員会（対面とオンライン併用） （札幌教育文化会館講堂）
12.10	応用生態工学会札幌　「氾濫原の保全と再生」テキスト勉強会 （対面とオンライン併用）（札幌教育文化会館講堂）
12.10	応用生態工学会金沢　Web 研修会 「激甚化する豪雨災害に対する流域全体の取り組み」
12.11	将来構想委員会（Web 開催）
12.17	会誌編集委員会（Web 開催）
12.17	応用生態工学会福岡　九州地区事例・研究発表会（Web 開催）

1.11	＜共催・応用生態工学会新潟＞新潟大学農学部野生動物生態学研究室主催 新潟市民シンポジウム～ 洋上風力発電について一緒に考えてみませんか？ ～ （朱鷺メッセ 4F 国際会議室）
1.19	第 88 回幹事会（Web 開催）
1 月	ニュースレター90 号発行
1.29	応用生態工学会名古屋　「氾濫原の保全と再生」テキスト勉強会（Web 開催）
2 月	会誌「応用生態工学」Vol.23－2 発行
2 月	理事会
3 月	ニュースレター91 号 発行
3.31	2020 年度（令和２年度）終了

９　事務局より

9.1　住所等の連絡先が変更となった場合は連絡をお願いいたします

会員情報の変更登録は、ホームページのトップ画面右上の「入退会･登録変更・購読」バナーから入り、「会員登録情報変更フォーム」から入力して送信してください。

また、下記 URL で「会員登録情報変更フォーム」へ直接接続することもできます。

https://www.ecesj.com/FS-APL/FS-Form/form.cgi?Code=change

会員情報変更のご連絡は、学会事務局のアドレス E-mail：eces-manager@ecesj.com にメールをいただくことでも可能です。

会誌のお届け、ニュースレター、その他連絡では、かなりの不達が発生しています。よろしくお願いいたします。

9.2　退会の申し出は学会ホームページの退会フォームからお願いいたします

退会の申し出については、退会フォームのほかに、事務局へのメール、電話、年会費払込請求書の通信欄に記載等でなされています。事務局の見落とし等の原因の元になりますので、できるだけ退会フォームまたは件名に「退会の連絡」等明示したメールによる申し出をお願いいたします。

9.3　既刊学会誌を希望する会員に頒布します（郵送料は負担してください）

学会事務局では、既刊学会誌の在庫整理を進めています。今後は一定の冊数を確保して、残りは希望者への頒布、廃棄を考えています。希望者多数の場合は、先着順です。

希望される会員は、学会事務局のアドレス E-mail：eces-manager@ecesj.com までお知らせください。申込者には、事務局から郵送料を計算してお知らせします。郵送料をいただいた後、発送します。

9.4　会員数および LEE 購読者数

2021 年 1 月 17 日現在

	会員数	対前年同時期比較	LEE 購読者数	対前年同時期比較
名誉会員	9 名	増減なし	1 名	減　1 名
正会員	861 名	減　15 名	※65 名	減　5 名
学生会員	91 名	減　2 名	6 名	増　3 名
合　計	961 名	減　17 名	72 名	減　3 名
賛助会員	44 法人（63 口）	増 1 法人（増 1 口）		

※賛助会員 1 社を含む